

【やや黄色い熱をおびた旅人】

7

ひまわり

1997年7月  
ベオグラード  
(ユーゴスラビア)

原田宗典

ひまわり。

ひまわりひまわり。

ひまわりひまわりひまわり。

見渡す限りいちめんのひまわり畑が、左右の車窓の向こうに広がっていた。ベオグラードの郊外から何十キロと広がるひまわり畑の真ん中に一本、二車線のみすばらしいハイウェイが通っている。私たちのロケバスは、その黄色い道を疾走していた。

疾走、と言うのは、決して誇張ではない。ベオグラード在住の日本人通訳O氏に紹介された運転手、BB氏は、全盛期のチャールズ・ブロンソンを想わせる渋いアラブ系中年男性である。普段は、冗談好きで人当

たりの好い性格の持主なのだが、ひと度車のハンドルを握ると、たちまち人格が変わってしまう。目的地がどんなに近くても、遠くても、最短距離の最短時間で行ってみせる——それが自分の使命だとBB氏は固く信じて、毎度毎度アクセルを目一杯踏み込んでしまうのだ。一般道路でもそんな調子なのだから、この国のほとんど唯一のハイウェイを走るとなれば、なおさらのことである。

彼の操るワゴン車は、限界と思われる百四十キロを保ちながら、旧ソビエト製の乗用車やトラックなどを次々と器用に追い越していく。車内には私たち取材班の一行四人と、通訳のO氏が乗り込んでいる。しかし五人が五人ともBB氏の運転に恐怖を感じながらも、互いに目を見交わして苦笑するばかりで、結局何も文句を言うことはできなかつた。彼に

とつての職場である運転席に座り、ハンドルを握りしめると、BB氏の表情は豹変する。その横顔には孤独な真剣さが漂っていて、今さら安全運転を呼びかけたところで、まず聞き入れられそうにない雰囲気だったのだ。

ひまわりひまわり。

ひまわり。

ひまわりひまわりひまわりひまわり。

ベオグラードの街を離れて、ドナウ河を越え、ひまわりの道を車で一時間半ほど。私たち一行は郊外の田園地帯の中にある名もない村に、セルビア人の難民収容所を訪れる予定だった。行けば私は、厭でも何かしら切ない現実を、また目の当たりにすることになるのだろう——そんな

気がしていた。

ふとその日の午前中に訪ねた、セルビア人難民の屋根ふき職人のことが思い出された。パンチエロという小さな町の片隅で、彼はやつとのことでありついた屋根ふきの仕事をしていた。パンチエロは一見戦争の影のない、安楽で平和な町に見えた。しかし実はその中に暮らす人たちの胸には、相も変わらず戦争の傷痕が残っているに違いなかった。例えば広場に面した町一番の高い建物——ゴシック様式の時計台があるのだが、その時刻が明らかにどうかしているのだ。私たちがパンチエロの町に入ったのは、朝の八時二十分くらいだったのだが、その時不意に、通りすがりの広場の時計台が鳴り始めた。狂ったように延々と十二回、響き渡ったのだ。何というはた迷惑な時計だろう、と私は一瞬眉をひそめたの

だが、よくよく考えてみれば、その狂ったような、どうかしてる鐘の音は、現在の混乱したユーゴスラビアという国そのものを表しているようにも思えてくる。こんなにも狂ってしまった時計台の時刻を、誰も直すことももしない。どうせまた近々起きる戦争でやられてしまうかもしれないのだから、そんなもの直したって無駄だと諦め切っているのだろうか。或いは市民の多くが、あまりにも辛い時代を過ごしてきたために「時間など知りたくもない」と言つて時計から目をそむけているのだろうか。いずれにしても町のシンボルであるはずの時計台の時刻を、すっかり狂ったまま放っぱらかしにしておける気持というのは、結構すさんだものではないのかと私は思った。

パンチエロ郊外に建つ、小ぢんまりした個人宅の庭先で、私はそのセ

ルビア人難民の屋根ふき職人と引き会わせられた。赤味がかったオレンジ色の屋根の上で仕事であった彼は、通訳のO氏が声をかけると、片手を上げて微笑んで見せ、斜めにかけて梯子をゆっくり降りてきた。片足を引きずりながら私たちに近づいてくると、一人一人と固い握手を交わす。年齢は、五十代前半といったところだろうか。長い年月にわたって苦悩しすぎたからでもなかるうが、目、鼻、口が顔の真ん中にぎゅっと集中してしまった容貌である。その眉間に深く刻まれた皺も、内戦で負傷した右足の痛みと同様、たとえ彼の顔が笑ってようとも、消えることはなさそうだった。

通訳のO氏を介して、彼はこれまでの自分の人生について、或いは自分の運命について淡々と語った。内戦が始まる以前の彼は、生まれ故郷

のクロアチアで三十人ほどの職人を使う、大工の棟梁だったという。それが或る日突然に戦争が始まり、自分の弟子だった連中までが彼に銃口を向けるようになったのだ。彼は家族を失い、右足の自由を失い、故郷を失い、こんな見ず知らずの土地で今さら屋根ふきの下働きをしている。何故だ？ 彼がセルビア人だったから。他に何の理由もないのだ。カメラが回っている前で語っている内に、冷静だった彼の口調が熱をおびてきた。アメリカの大統領をここに連れてきてくれ、と彼は訴えた。アメリカの思惑のおかげで、セルビア人は一方的に悪者にされ、ユーゴスラビアは世界中から経済封鎖をくらっているが、それは間違っている。誤解だ。セルビア人だって虐殺されたのだ。自分はたまたま運よく右足一本で済んだのだ。そのことを分かってもらいたい。彼は最後には怒りに



満ちた目をして、そう言ったのだった。

ひまわりひまわり。

ひまわりひまわりひまわり。

ひまわりひまわり……。

私は彼の前で、自分の咎を責められているような気分だった。あの目。私はそれを振り払うように、窓外のひまわり畑に目をはせるのだった。行けども行けどもひまわり畑。ひまわり以外には何も見当たらない風景だ。西欧では、一般の食卓の料理にはひまわり油を使うので、あちこちに広いひまわり畑がある、という話を海外通の友人から聞いてはいたものの、まさかこれほどまでに広大な規模のものだとは思わなかった。何しろロケバスは百四十キロ近い速度でぶっとばしている——にもかかわ

らず窓外には、既に二十分近くの間、いちめんのひまわり畑が一度も途切れることなく、延々と広がっているのだ。

どのひまわりも大ぶりで、人の背丈くらいの高さがあるものばかりだった。それが、見渡すかぎり同じ方向を向いて、まっ黄色に競い合っている。その風景には最初のうちこそ驚かされるものの、眺める気が落ちついてくるにつれて、次第に不気味な印象が募ってくる。ベオグラード郊外に広がる、あまりにも夥しい数のひまわりの群れ——それらは私に、隊列を組んだ黄色い兵隊を想像させたのだ。見渡すかぎり整然と、同じ方を向いて立ち並ぶ、物言わぬ黄色い兵士たち。そう考えると、ひまわりの一本一本が、死んだこの国の兵士たちの代わりに、ここに生えているようにも思えてくる。

ひまわり。

ひまわりひまわりひまわり。

ひまわりひまわり……。

やがて私は兵士の連想から離れて、また別のひまわりを巡る物思いに耽っていた。ひまわりと言えば、やはりどうしてもゴッホの絵を思い出してしまふ。実際に本物のひまわりを育てたりして、身近なものであったのは小学生のごく一時期で、その後の私にとっては、ひまわりなんて自分とはまったく無関係な植物でしかなかった。ところが一方で、ゴッホの描いた「ひまわり」については、年齢を重ねるごとに強く惹きつけられるものがあるのだ。どうしてゴッホは決して長いとは言えない創作活動の中で、何度も繰り返し「ひまわり」を描いたのだろうか。何故他

の花ではなくて、ひまわりだったのだろうか？ この素朴すぎる疑問に  
関する、ちよつとしたヒントに出会ったのは、ごく最近のことだった。  
それは意外にもイギリスの詩人、ブレイクの詩集の中にあつた。本自体  
は大分前に買うだけ買って、長らくベッドの枕元に積んであつたものを、  
或る時たまたま手に取つて開いてみたのだ。ごく不真面目に目を通して  
いったところ、中に一篇「ああ ひまわりよ」と題する詩があつた。私  
はそれを読んだ。

ああ 日の花よ 時に倦み

日の足音を かぞえつつ

したいわぶる 金色のゆかしい国——

旅人の旅路のはてにあるという。

そこを やつれはてたわこうど、

雪白の衣まとう あおざめた処女は

墓より立ちあがり、あくがれる——

私のひまわりが慕うかなたの国。

たったこれだけの短い詩である。一度読んだだけでは、私には何の詩なのかよく分からなかった。だからこそ読みとばせなかったのだ。私は改めて題名に目をやり、「ひまわりよ」という言葉からゴッホの絵を連想した。あの強烈な色彩を思い浮かべながら、もう一度ブレイクの詩を

読んでみたのだ。すると言葉と絵の両者が驚くほど呼応して、互いに響き合い、私の中に、今まで一度も思い描いてみたことのなかった「ひまわり」のイメージを喚起するのだった。

おそらく詩人ブレイクと画家ゴッホは、同じひまわりを見たのだ。

私は直観的にそう思った。そういえばこの二人には常に神の存在がつきまとい、終生、幻視に悩まされたり啓示に励まされたりしていた、という共通点もあるのだった。何故ゴッホは他の花ではなく、「ひまわり」を描いたのか？ その理由らしきものが、ブレイクの詩の言葉の中に、かすかに垣間見えるように思えた。

「金色のゆかしい国——旅人の旅路のはてにあるという」

ひまわりはそういう国を慕いわびる花。旅人の旅路のはてに咲きたい

と願う花が、ひまわりなのだ、とブレイクはうたっているのだろう。そういう言い伝えがもともと西洋にはあったのか、或いは詩人自らが生み出したものなのかは、定かではない。けれどその百年後に現れたゴッホという画家が、そういう「ひまわり」を描こうとしたのは確かなことだ。金色に輝くひまわりの花の向こう側に、彼は旅人の旅路のはてを見据えていたのではなかったか？ ゴッホがブレイクの詩を愛読していたというのではない。調べたところで、おそらく二人を結びつける根拠は見つからないだろう。ただ両者はともに「旅人の旅路のはて」に生きようとした人であり、そんなぎりぎりの生の淵に立てばこそ垣間見える、切実な何かを描こうとした人であった。時代は異なるろうとも、二人はまったく同じ場所に立って、そこに咲く同じ「ひまわり」を見たのだ。私は自

分の直観だけをたよりに、そんな解釈を施して、一人で悦に入っただ  
った。

ひまわりひまわり。

ひまわりひまわりひまわり。

ひまわりひまわり。

こんなにもひまわりが咲き乱れるベオグラード郊外もまた、「旅人の  
旅路のはて」ということになるのだろうか。私は、自分が「旅人」とし  
てここに在ることを、改めて思い出す。旅人として辿った今までの旅路  
を、ぼんやりと反芻する。窓にもたれ、目の端にちらちらするひまわり  
の黄色を意識の外へ追いやろうとしている内に、私はいつしかうたた寝  
をしていた……。



十分か、二十分か。どれくらいの時間が経ったのかは分からない。はっと気づいた時には、もう窓外にひまわりの姿はなくなっていた。見えるのは、名も知らぬ草と樹ばかりである。ロケバスは既にハイウェイから一般道に下り、今は未舗装の田舎道を走っていた。路面の状態があまりにも悪いため、さすがのBB氏もアクセルを踏み込みかねている様子だ。

「まもなくです」

助手席に座っている通訳のO氏が、振り向いてそう告げた。音声のN氏もカメラマンのA君もそれぞれの機材の準備をし始めて、車内はとにかく慌ただしくなった。私は準備すべきものが何もなかったもので、空咳を漏らして居住まいを正した。ただ緊張して待つことだけが、私の準備

なのだ。ロケバスは土埃のたつ田舎道をしばらく走った後、牧草とも雑草ともつかぬ草地に入った。やがて路面が泥濘に変わり始めたところで、BB氏はブレーキを踏んだ。フロントグラス越しに、古ぼけた木造の平屋が見える。それがセルビア人の難民施設であった。

車から降りた私たちを出迎えたのは、鶏の鳴き声と、鶏糞の臭いだつた。見ると、すぐ傍らに簡素な鶏小屋がある。多分物置か何かを改造して、造ったのだろう。おざなりに取りつけられた金網の中で、五羽にも満たない痩せた鶏たちが、ありもしない餌をついばんでいる。その脇を通り過ぎてしばらく進むと、右手に懐かしい手漕ぎ式のポンプがついた井戸があり、左手には木造の平屋が見えた。

近づくにつれて、その施設は、私が予期していたものより数段劣る、

ごく貧しい建物であることが分かってきた。コの字型に建てられた平屋は相当古いもので、廃屋寸前といった趣である。一面雑草の生えた中庭らしきスペースに立ってみると、左右の棟がそれぞれ外側に向けて微妙にかしいでいるのが分かる。こんな危なっかしい建物に、彼らセルビア人難民たちは暮らしているのだ。何しろつい今さっきまで、中庭の辺りには人の気配があった。子供たちの遊ぶ声も聞こえていたのだが、私たち余所者がやってくるのを察してか、誰もが素早く隠れてしまったのだ。息を殺し、こちらの様子をじっと窺う気配が、あちこちの物陰に感じられる。

しかし先頭を行くディレクターのT君と通訳のO氏は、コの字型の平屋の前を素通りして、先へと進むのだった。荒れはてた畑の中の農道を

抜け、百メートルほど先にあるプレハブの建物に向かう。聞けば、取材許可を取りつけたセルビア人難民のV氏が、そこで仕事をしているのだという。クロアチアにいた頃の彼は、国内でも有数のインテリア会社の社長だったと、通訳のO氏が教えてくれた。しかし現在は、月に一度あるかないかの注文を受けて、自分の手で家具を作っているらしい。

プレハブの建物のドアを開けると、削りたての木屑の匂いがした。中は家捜しをされた直後みたいな散らかりようだ。作業台に向かって、木製の家具を作っている最中の男が、私たちを振り返った。前頭部が禿げ上がった、眉の濃い中年男性だ。五十歳前後だろうか。目が合うと、両手を広げて歓迎の意を表し、自ら歩み寄ってきて私の手を握った。力強い握手だった。が、それら一連の反応の中には、どこかしら無理が感じ

られた。実際のところ彼らの暮らしぶりには、遠国からの客人を歓迎する余裕などないはずなのだ。ならばこの男は何故、仕事の邪魔にしかない私たちを迎え入れる気になったのだろう。NHKがある程度の謝礼を約束したからか。それとも相手がどこの国の放送局であれ、テレビを通じて是が非でも訴えたいことがあるのだろうか。既にカメラが回っているのを意識して、私はまず目の前にある、当たり障りのないことを質問した。

「それは何を作ってるんですか？」

「チェストだよ」

彼は通訳のO氏を介して答えた。

「安物のパイン材だけだね、こうやって削る段階でちよつとした工夫

を施しておく、塗装が映えて、かなり高級な風合に仕上がるんだ」

「へえ、凄いですね」

「昔とつた杵柄だよ。こう見えても俺は、若い頃はクロアチア一番の家具職人だったんだ。ウィーンの貴族から注文がきたこともあったな。

嘘じゃない、本当だよ」

言いながら彼は作業用の前掛けを外し、木屑をはたき落としてから、残り少ない髪を丁寧に撫でつけた。家具職人であったことはともかく、その後出世して大手インテリア会社の社長にまで上り詰めたことを、彼は語ろうとはしなかった。いくら私が水を向けようとも、会社を経営していた時代については言葉を濁し、話をはぐらかせてしまうのだ。代わりに彼は、今現在の注文が極端に少ないことと、一旦家具を作り出すと

あちこち凝ってしまい、時間がかかり過ぎて割りが合わないことをぼやくのだった。

「まあ、とにかく外へ出よう。いい空気を吸って、それから家族を紹介するよ」

そう言つてV氏はズボンについた木屑をはたきながら、表へ出ていった。カメラを回し続けるA君を先頭に、私たちもぞろぞろと後にく。

見上げると空は、何の問題もなく隅々まで晴れわたっていた。ひまわりの群れが揃つて見つめていた太陽はやや傾いて、午後二時の陽射しで我々を照らしていた。しかし一方で大地に目を向けてみると、そこには実際何か殺されたような殺風景が広がっているのだった。見渡すかぎり広大な荒畑。おそらく戦争のせいなのだろう、この一帯には荒れたま

ま何年も放っておかれた畑しかなかった。最高の青空の下、最低の大地を、私たちは無言のまま歩いた。

やがてコの字型の平屋に辿りつくくと、V氏は中庭に向かって左側の棟へと私たちを案内した。こいつはもう半世紀も前の建物だ、と彼は歩きながら教えてくれた。周辺一帯の畑が豊作続きで、人手もたくさん必要だった時代に、季節雇いのジプシーたちを寝泊まりさせたのが、この平屋なのだという。

「他にどこにも行き場のない奴らが住む家なんだよ。昔も、今もな」  
彼は自嘲気味にそう呟いて、乾いた笑いを漏らすのだった。私はしばらくの間、何も言えなくなってしまった。

建物の中は薄暗く、どこからか糞尿の臭いが漂っていた。そういえば



私が通っていた小学校の校舎の別棟にあった、古い木造の便所が、ちょうどこんな感じだった。陰気な板張りの廊下の両側に、等間隔で扉が並び、セルビア人難民の収容施設、と聞いた時に私が抱いたイメージとは、大きくかけ離れている。ついこの間まで大会社の社長だった人が、こんなところに暮らしているのかと思うと、私は前を行くV氏の背中を、まともに見つめられなくなった。

彼は、一足ごとにきいきい軋む廊下を一番奥まで進むと、左側の扉の前で立ち止まった。ノックをして、ひと間おいて扉を開きながら私たちに手招きをする。まずカメラマンのA君がそれに応じて素早く近づき、開いた扉のところから室内の様子を撮影し始める。音声のN氏と私が、彼の後に続く。

「これが我が家だ」

V氏は独特の節をつけてそう言うと、中に入って見るよう私を促した。背中を押されて一歩、室内に足を踏み入れる。同時に、生々しい男臭さが鼻についた。柔道部の部室や、飯場の四人部屋なんかで嗅いだ記憶がある臭いだ。私は思わず息を詰めた。

六畳にも満たない室内には、寝床しか見当たらなかった。右手の壁際には、V氏の手作りだろうか、極端に幅の狭い寝台が据えてある。そして左手の壁際には、二段ベッド。丈がある分、余計に存在感があつて、室内空間のほとんどすべてを占めているように感じられる。二種類のベッドの間には、ようやく一人一人が通れるくらいの通路があつて、突き当たりの小窓の真下に、奥行きが少なく平べったいチェストが置いてある。

一応窓際まで行ってみるつもりでもう一步足を踏み出すと、左手の二段ベッドの下側に、誰かの脚がちらりと見えた。高校生だろうか、十代半ばの男の子が仰向けに寝転がって、コミックスらしき雑誌を読んでいる。私と目が合っても、何の感情の動きも感じさせずに、また手元の雑誌に目を落とす。「やあ」と私は右手を上げて、こわばった笑顔で挨拶をしてみたが、返事はなかった。

「あのう、そちら上の息子さんだそうですね」  
背後からO氏が言う。

「十七歳だから、高校生ですね。もう一人の息子さんは不在なんです  
が、十六歳で、やはり高校生だそうですね」

思春期まっ盛りの高校生の息子二人と、こんな間近に顔を突き合わせ

て暮らすのは、どんな気持だろう。三人とも背を向け合ったまま何の会話もなかったとしても、或いは毎日がみあって摺み合いの喧嘩をしていたとしても、彼ら父子を責めることなど誰にもできないだろう。

改めて眺めると、二段ベッドが置いてある左側の壁面には、上から下までたくさんのポスターや、写真の切り抜きが貼ってあった。映画スターや、サッカー選手や、F1マシンや、ミッキーマウス。しかし中でも一番数多く貼ってあるのは、水着姿の女の写真やヌードのポスターだった。一方、父親のベッド側の壁面に目をやると、枕元にただ一枚、キリストを描いた宗教画を額に入れて飾ってあるだけだ。その対比は微笑ましいような、切ないような印象を私に与えた。

「これが我々セルビア人難民に与えられた暮らしだ」

扉のところから、V氏はそう言った。しかしこれでも自分たち一家は、恵まれている方なのだ。国内の難民収容施設は、作っても作っても追いつかない状態で、順番を待ち詫びる難民が数限りなくいるという。たとえ傾いた平屋の物置みたいな部屋でも、屋根の下で眠れるんだから、それだけでも幸運なことだと彼は言った。

私は訳知り顔で頷いたのだが、十七歳の息子には何か別の言い分があったのだろう。二段ベッドの下から父親に向かって、早口で何事か意見したのだ。V氏はたちまち顔色を変え、声を荒らげて応酬する。しかし息子は怯む様子もなく、大声で反論しながら、手にしたコミックスの雑誌を私たちに投げつけてきた。それはカメラマンのA君の太腿に軽く当たって、床に落ちた。開いたページには、ベッドインした若い男女のも

とにコンドームのセールスマンが訪れる、という展開の漫画が描かれていた。

その絵をざっと眺めた後、私は無言のまま部屋を後にした。廊下に出ると、腹の虫のおさまらないV氏が、ディレクターのT君を相手に、息子に対する悪態をついている。あいつは何も分かっちゃいない。現実をなめてるんだ。学校にも行かなきゃ、働きもせずに、ああやって一日じゆう寝転んで漫画を読んでやがる。俺が意見すると、これが自分の人生だって開き直るんだからな。二段ベッドの下の段が、奴の世界のすべてだなんて、真顔で言いやがるんだ。まったく手に負えないよ。

「どうしたもんかねえ」

そう言って肩を竦めるV氏の横顔を眺めながら、私は先程から胸にわ

だかまっている質問を口にすべきかどうか、迷っていた。彼の女房、つまりあの息子たちの母親は、どうしたのか？ 戦争の最中に亡くなってしまうたか、或いは行方不明になったままか。いずれにせよ十中八九、無事ではないのだろう。そのことをV氏本人に確かめるのは、どうしても躊躇われた。結局私は通訳のO氏に目くばせして傍へ寄り、小声でこっそり訊いてみることにした。

「あの……彼の奥さんのことなんだけど」

耳元でそう囁くと、O氏は苦しそうな顔をして二、三度頷いた。明らかに、知っているけれども話したくなさそうな様子だ。彼はV氏が背中を向けていることを確かめてから、

「後で」

と静かに答えた。すると同時にV氏が振り返って、私たち二人を見た。

「女房のことかい?」

その声や表情は、怒っているようでもなく、悲しそうでもなかった。

「女房のことが知りたいんだろ?」

彼はまるで今日の朝食について尋ねられたかのように、ごく当たり前の顔で話し始めるのだった。

「女房は半年前、別の男と逃げてしまったよ。スイスだかオーストリアだか、分からないけど外国にいるはずだ。ここの暮らしには、とても堪えられなかったんだ。無理もないよ。俺がもし彼女だったら、まったく同じことをしたと思うね。だから俺は女房のことを責めるつもりは、これっぽっちもない。神かけて本当だ。彼女は悪くない」



彼は私の目を見つめながら、淡々と語った。私は黙って深く頷いた。薄暗い廊下の中にあつて、彼の影だけが一際濃くなつたように感じられた。

「ただあいつらはな……息子たちはそう簡単に納得できないだろう。二人ともまだ子供だからな。自分たちが母親に棄てられたと思つてるんだよ。だからああやってふてくされてるのさ。まったく手に負えないよ」

V氏は自分の部屋の扉の方をちらりと見やって、苦笑を浮かべた。そして「どうしたもんかねえ」と一言ぼやいてから、歩きだした。彼の一足ごとに、廊下がいよいよ悲鳴を上げる。私は目を伏せて、床面にぼんやりと映る彼の影の後をついていった。

中庭には、午後の陽射しが降り注いでいた。

しばらくは眩しくて、まともに目が開けられない。足元から草の、緑の匂いがする。私はポケットから煙草を出して一本銜え、隣にいたV氏にも勧めてみた。彼は目の色を明るくして、私が差し出したパッケージから一本抜いた。ユーゴスラビアの人たちは男女ともに、超がつくほどの煙草好きが多い。彼もまたその一人なのだろう。一本の煙草を、彼は実に美味そうに呑むのだった。

今さつきまで物陰に隠れて、私たちの様子を覗き見していた子供たちが、ここへきて我慢できなくなったらしく、一人また一人と中庭に姿を現した。はにかんだ愛らしい笑顔を浮かべながら、少しずつ私たちの傍へ近づいてくる。やはり日本人を見るのは、これが初めてなのだろう。

彼らは特にA君が持っているプロ仕様のビデオカメラが、気になって仕方ないようだ。いつのまにかA君の周囲には、男女合わせて六人の子供たちが集まっていた。下は五歳から上は十歳くらいまでだろうか。おそらくどこかから寄付されたものだろう、どの子供も一昔も二昔も前のデザインのもの、懐かしい子供服を着ている。しかし服だの靴だのが多少くたびれていようと、そんなことは大した問題ではない。彼らが心から楽しげに笑うのを目にすると、服装の印象など消え失せてしまうのだ。この陰気な施設に暮らす、子供たちの明るい笑顔には、ちよつとした引力がある。その笑顔の力は、彼らが戦争の中を生き抜いてきた過程で、培われたものなのだろうか。A君は子供たちを整列させて、順番にビデオカメラを触らせてやっていた。子供たちは興奮して、きゃあきゃあはしゃ

ぎ回った。中庭を照らす陽射しが、一際明るくなったようだった。

やがてディレクターのT君が腕時計に目を走らせ、さてそろそろ始めましようか、と皆を促した。とにかく日暮れまでに、幾つかのカットを撮っておく必要があるのだ。T君は通訳のO氏を呼び寄せて、多少頼みにくそうに言った。

「この後なんですけど、彼のお母さんが暮らしてる部屋の方も撮りたいんですが、大丈夫ですよね」

大丈夫ですよ、とO氏は即答した。その件は前もって彼に確認してありますから。でも念のためもう一度訊いておきましょうか。早口でそう言って、O氏はV氏にその旨を尋ねた。構わない、と彼は頷いた。

「セルビア人難民の年寄りが今、どんな境遇にあるのか、そのカメラ

でありのままに撮ってくればいい」

彼は物静かな口調でそう言った。戦争というやつは未だに我々の人生を蝕んでいる——戦争はまだ終わっていないのだ。そういう意味のことを呟くと、彼は今度は中庭に向かって右側の棟を目指した。私たち一行も後に続くと、子供たちまでが面白がって後からぞろぞろついてくる。

右側の棟の出入口脇には、トタン屋根を設えた共同炊事場がある。たった今、野良から戻ってきたばかりらしい中年女性が四、五人そこに集まって、楽しげにお喋りをしている。井戸端会議というのは、どの国でも似たようなものであるらしい。彼女たちは傍を通り過ぎる私たちを一瞥すると、急に小声になって何事か言い交わした。言葉は分からないが、言い方のニュアンスから察すると、私たちの後に続く子供たちには分か

らないような隠語で、性的なことを話題にしたのではなからうか。ややあつてから、彼女たちはいっせいに笑い声を上げた。

それを聞いて、何となくほっとしたのは、私だけではなかつたろう。前に行くスタッフたちの背中も、自然と微笑んでいるのが分かる。女性の笑い声が、こんなにも自分を慰めてくれるものなのだとは、私は今まで気づかずにいた。

彼女たちの明るい笑い声とは対照的に、建物の中はやけに薄暗く感じられた。目が慣れるまでしばらくの猶予がある。その間、私はまた糞尿の臭いを嗅いだ。一足ごとに、廊下に張った板が、セルビア語できいきい軋む。先程訪れた向かいの棟と同じく、廊下の両側には等間隔で扉が並んでいる。造りはまったく同じだ。なのにこちらの棟の方が、より一

層陰気に感じられるのは、何故だろう。もしかしたらこの棟には、年老的難民ばかりが暮らしているのかもしれない。そういえばどの部屋からも何の物音も聞こえない。静まり返った廊下を歩きながら、V氏は懐かしそうに言うのだった。

「女房はこっちの部屋でおふくろと一緒に暮らしてたんだ。いや、二人は仲が良かったんだよ。何だか知らないけど、うまが合うみたいでね。楽しそうに一日じゅうでもお喋りしていたもんだ……」

彼は奥から二番目の扉の前で立ち止まると、軽くノックしてから返事を待たずに中へ入っていった。先程見た向こうの棟の部屋よりも、こちらの方が狭いだろう。四畳半にも満たない、ちっぽけな部屋だ。右手の壁際にベッドがあり、窓際に据えた花台に花瓶が載せてあって、小さめ

のひまわりが一輪生けてある。それ以外の家具というのは何ひとつない。そして黒い頭巾を被った西洋の魔法使いみたいな老婆が一人、何故かベッド脇の床に座り込んでいる。見ると、ベッドの上には新聞紙が敷いてあり、茶殻のような葉が一面にばらまかれている。居場所がまったくなさそうなので、私とカメラマンのA君の二人が扉付近に陣取り、その後から音声のスタッフが長い棒につけたマイクを何とか室内に差し入れた。通訳のO氏は私の腋の下から顔を突き出し、ディレクターのT君は完全に蚊帳の外で待機するしかなかった。

「俺のおふくろだ」

V氏はそう言って、床に座り込んでいる老婆に何事か早口で告げた。不意の東洋人の乱入に、怪訝そうな顔をしていた彼女は、息子の説明を



聞くとたちまち相好を崩して、

「ああ、ああ、ああ、まあ……」

と感嘆するばかりだった。通訳のO氏が我々の取材意図を告げると、彼女はよろよろ立ち上がり、一番近くにいた私の手を握りしめながら、  
「まあ、まあ、それはまた本当に遠くから、ああ、こんなところへ。ようこそいらっしやいました」

と嗚れた声で言った。私はその手を緩く握り返した。荒れてはいるが、たった今まで日向に晒していたように温もった手だった。老婆は言葉を続けた。

「私は日本の人と会うのは、これが初めてです。ああ、ああ、そうですか。本当に心から歓迎します」

しかしその言葉とはうらはらは、老婆は段々切なげな顔になって、  
「けれど、申し訳ありません」といきなり詫びるのだった。握っていた  
手を放し、いつの間にか目元に滲んでいる涙を指先で横ざまに拭いなが  
ら、謝ろうとする。その皺くちやの樹の幹のような顔から、私は目が離  
せなくなった。

「せっかくのお客様なのに、今の私にはコーヒーをお出しすることも  
できないのです。ごめんなさい。ごめんなさい。どうか私の無礼を許し  
てください……」

私には、何故彼女がそれほどまでに申し訳なさそうに言って涙を零す  
のか、理解できなかった。通訳のO氏の方を見やると、彼もまた瞳を潤  
ませながら説明してくれたのだった。クロアチアも含めた旧ユーゴスラ

ビア一帯では、慣習として、お客様にコーヒーをふるまうのが、最低限の礼儀とされているのだという。難民となった老婆は、そんな基本中の基本である礼儀すら守れない自分が情けなく、恥ずかしく、けれどどうしようもなく泣いているのだ。

「今私の手元には、紅茶の出廻らしの葉しかありません」

老婆は涙をすすりながらそう言って、ベッドの上にはばらまいた葉を指さし、

「でもこの通り、それすらも乾かしている途中なのです。ああ、ああ、ああ。せっかく、せっかく遠い国から来て下さったのに。私には何ひとつしてあげられない。私はいつのまにこんな礼儀知らずの人間になってしまったのでしょうか。ああ、ああ、本当に申し訳ありません」

老婆はとうとう両手で顔を覆って、傍らに控えていた息子のV氏の腕の中へ泣き崩れた。氏は、難しい顔をしていた。本当は、私自身も声を放って泣き出したかった。しかしそれは許されないことだ。取材と称して半ば物見遊山で訪れた人間が、この場だけで貰い泣きをするなんて、彼女の涙の価値を貶めるだけのことではないか。だから私は、泣くまいとした。そして潤んだ瞳を窓際の花瓶に生けてある、一輪のひまわりに向けた。

「ああ、ひまわりよ」

私は心の中で叫んだ。何故おまえはこんな場所にあつて、そんなにも黄色く、屈託もなく咲いているのか。私には、老婆を慰める言葉など一言もない。今の自分は、一輪のひまわりにも劣る人間だ。私は、相手の

切実な現実とそこに暮らす気持など何も考えず、難民の施設をただ見物にきただけの愚か者だ。

いつのまにかカメラマンのA君が隣へ回り込んで、私の横顔のアップを撮っていた。涙が零れるところを撮りたかったのだろう。それが分かったので、私は無言のまま素早く踵を返すと、扉のところに固まっていたスタッフたちを押し退けて、部屋を後にした。軋む廊下を抜け、表へ出る。

空は相変わらず青かった。日暮れ前の、柔かな陽射しが、人けのない中庭に降り注いでいる。私は自分の涙をふり切ろうとするかのような勢いで、草むらを横切った。

ひまわり。

ひまわりひまわり。

ひまわり……。

草いきれを嗅ぎながら私は、またひまわりのことを思い浮かべていた。老婆の部屋の窓際の花瓶に一輪、咲いていたひまわりのことを。あれが旅路のはてに咲いたひまわりの姿なのかと。